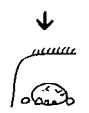


石

二年
 画数 5
 筆順 一 ㄱ 石
 オン セキ・シヤク・コク
 クン いし

戒り立ち



石 石 石 石 石

がけのしたにころがつている「いし」のかたちをあらわした字で、「いし」のことをあらわした字です。ただ「いし」のかたちをかいただけでは「口」という字とおなじかたちになってしまいますので、くべつするために「がけ」のかたちの「フ」をくわえたものです。

「セキは漢音で、シヤクは呉音である。だから、古い言葉は「盤石」とか「磁石」とか、みなシヤクと読む習慣がある。」

使い方

▽ながい「石段」をのぼっていきますと、「石碑」や「石像」のあるところにでました。
 ▽「磁石」は、てつをひきつける力があります。この力を「磁力」といいます。

熟語例

▽石段（石でつくられた階段。石の段段）
 ▽石頭（石のようにかたい頭。また、「ものわりのわりの人」のいみにつかいます。）
 ▽石碑（石にぶんしようをほりつけてたてたもの。「石ぶみ」ともいいます。）
 ▽石像（石でつくられた像。銅でつくられたものは、「銅像」、木でつくられたものは、「木像」です。）
 ▽石器（まだ金ぞくがつかわれなかつたむかしの人がつかつた「石でつくつた器具」のこと。）
 ▽石火（火うち石からでる火。ひじょうに「すばやい」ことや、「みじかいじかん」のいみにつかわれます。）
 ▽石の上にも三年（どんなことでも、三年しんぼうしてやりつづけたら、かならずものになる、といういみのことわざです。）

赤

二年
 画数 7
 筆順 十 土 赤
 オン セキ・シヤク
 クン あか・あかい・いらむらむらめる

戒り立ち



赤 赤 赤 赤 赤

もえている「火」のようすをあらわした字の「火」と「大きい」という字のへんかしたかたちの「土」とをくみあわせた字で、「大いにもえる火の「いろ」をあらわしたものです。

「あかい」「いろ」をあらわした字です。

「まるはだか（まったくのはだか）」のことを「赤はだか」といいかたをします。それで、「ていどのひどいじょうたい」をあらわすのに「赤」ということばをつかうようになります。

使い方

▽東京大学のことを「赤門」というわけは、赤くぬられている門があるからです。
 ▽たんじょうびなので、けさは「赤飯」をたべました。
 ▽赤銅いろのはだをした人びとが、なつたいようにてらされてはたらいっていました。

熟語例

▽赤字（ちようばにふそくのきんがくを赤い字でかくところから、「おかねがたりない」ことをいいます。）
 ▽赤信号（「とまれ」のこうつう信号。さけんを知らせる信号です。ものごとがうまくいかないようすをいうのにもつかわれます。）
 ▽赤飯（おいわいのときにたくご飯で、もちごめにあずきをいれてむしてつくります。赤いので「赤飯」といいます。）
 ▽赤面（面はかおのこと。はずかしいとかおが赤くなるので、「はずかしい」といういみにつかいます。例 赤面のいたりです（ひじょうにはずかしい）。）
 ▽赤銅（銅という金ぞくのこと。「赤金」のこと。赤銅いろは「赤ぐろいろ」のことです。）